

---

# 椿野にいる

海日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

椿野にいる

### 【Nコード】

N6147U

### 【作者名】

海日

### 【あらすじ】

蒼毅が夜ごとに見る、妙にはつきりした夢。その中でいつも、蒼毅はある人物に絶対に逢いに行くと約束する。夢の中の約束は、現実世界で果たされるのか？

(前書き)

日本、という言葉が出てくるけれど、私たちの知る日本とはどこかが違う世界。

その世界にはかつて魔術や秘術が存在し、それらが滅びた今でも、かつてそれらが存在していたことを事実として認める世界

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

扉の向こうでは怒声が飛び交い、自分たちを探しているのだと知れる。

部屋のすみに1つだけある蠟燭立ての蠟燭が、火を揺らめかせてじじ、と音を立てた。

海辺の小国、夢斗領<sup>むとりょう</sup>は夢斗城<sup>むとしじょう</sup>、薄暗い地下の一室に、2人の少年がいた。

どちらも15歳くらいで、筒袖の和服に似た衣装を纏っている。体格もほぼ同じくらいだろう。

1人は意志の強そうな紅の瞳にきりりとした眉、黒髪を短く切っていて、もう1人は細い吊り目に薄い眉をしており、背中に届く黒髪をうなじで1つに括っていた。

髪を括っているほうの少年は手にしていた長剣を扉に立てかけつつかい棒代わりにすると、部屋の奥にある井戸の蓋を外す。

すると、井戸の縁からわずか30cmほど下の水面に彼の顔が映った。

紅の瞳の少年がはっとしてその肩を掴む。

が、彼はその手を掴み返すと紅瞳の少年を井戸に投げ込んだ。

ざんっ……

1度沈んだ少年は慌てて浮き上がり、井戸の縁を掴んで抗議の声を上げる。

「ばっ…… てめえ、何しやがる!？」

その声は、隠れているということもあり抑えられてはいるが、確実に怒気を孕んでいる。

彼は静かに言った。

「逃げる。この井戸は海に繋がってる。それがある限り、お前ならどこまでだって潜っていけるだろう」

彼が見たのは、紅瞳の少年の左手首にある腕輪。

いくつもの管玉や丸玉が連なるそれには、一際大きな蒼い勾玉がついていた。

この勾玉の腕輪は、この夢斗領の領主一族に伝わる秘宝。

身につければありとあらゆる水の加護を得ることができ、溺れるなどということもない。

彼は続けた。

「本当は、領主になんかなりたくないんだろう、涼矢。

お前は、若君として偉そうにしてるより、お忍びで城下街の奴らと遊んでるほうがよっぽど幸せそうだなもんな」

苦笑とともに紡がれた言葉に、涼矢と呼ばれた紅瞳の少年は表情を曇らせて俯いた。

そんな親友の様子に、彼は笑う。

「逃げる。海に出たら、どこかよその国へ行くんだ。

そうすればお前は、もう身分なんか振り回されることもない。」

領主一族の証たる紅の瞳が、きつと蒼毅を睨んだ。

「ふざけるな。確かに領主になんざなりたくはねえ、けどおれはこの国が好きなんだ。

放って逃げるなんてできるか」

想像通りの反応に、蒼毅は笑みを深くした。

「だろうな。お前はそういう奴だ。けど、これは領主様や奥方様のご命令でもあるから」

涼矢の表情が凍りつく。

両親の顔がその脳裏を過ぎった。

「何で……………?」

涼矢は呆然と呟く。

蒼毅は言った。

「あの人たちも、お前が領主になりたくないと思ってるのを察してたんだろう。」

「いい機会だと仰せだったよ」

国を捨てて逃げるといふ選択は、涼矢にとっては身を切るような辛いものだろう。

それでも、命令とあらば従わないわけにはいかない。

ぐっと唇を噛み締めて、涼矢は声を絞り出すように言った。

「……確かに、この腕輪をつけてるおれは、なんとかなるだろう。」

けど、お前は、どうすんだよ」

紅い瞳で見上げてくる涼矢に、彼は穏やかに笑う。

細い吊り目に薄い眉と、見ようによっては怖いその顔立ちは、この表情のおかげでずいぶんと親しみやすくなる。

「しばらくしたら、探しに行くよ。涼矢がどこかに落ち着いた頃に」  
けれど。

戦に敗れ、他国に占領されようとしているこの夢斗領。

その次期領主の側近である彼が、生かしておいて貰える可能性は低いのではないか。

そう心配する親友であり主君に、彼は言った。

「大丈夫。おれはお前の影武者として生き、そして死ぬために生まれた存在だ。お前が死ぬまで、おれは死なない」

ただの、詭弁だ。

それなのに、それを否定することが涼矢にはできない。

そう信じなければ、今にも胸の中で何かが崩れてしまいそうだった。

彼はさらに続けた。

「心配するな。絶対に逢いに行く。おれなら、お前がたとえどこにいようと必ず分かるから」

全く同じ日、同じ時間に生まれ、誰よりも長く近くにいた2人の、絆とでも言うべき力。

部屋の外が、にわかに騒がしくなる。

どうやらこの部屋を嗅ぎ付けられたらしい。

さっと表情を引き締め、彼は井戸の蓋に手をかけた。

「閉めるぞ、早く潜れ」

「待て……………!!」



涼矢は親友の胸倉を掴み、お互いの顔を近づけて囁いた。

「椿野にいる。この瞳と同じ、紅い椿のあるところにいるから」

だから、絶対探しに来い。

それを最後に、涼矢は身を翻して井戸の底へと潜っていく。

その姿が見えなくなったのを確認して彼が井戸の蓋を閉めた瞬間、部屋の扉が破られた。

つかい棒にしていた長剣が宙を舞い、持ち主の手に戻る。

宙に舞った愛刀を掴み取った彼は、部屋に押し入ってきた者たちを鋭く睥睨する。

数は10人ほど、1人で相手にするには少々分が悪い。しかも相手は皆武装した屈強な大人の男たちときた。

けれど、探しに行くのと約束したから。

男たちの1人が進み出て尋ねた。

「……お前、若君の側近だな。主はどうした」

「答えると思ってるのか？」

人を喰ったような彼の返答に、男はにやりと嗤った。

「まさか。最初から期待などしとらんさ」

「だろっな。賢明だ」

すらりと音を立てて、彼が長剣を抜く。

それは、日本刀と言つにはあまりにも長い。彼自身の身長よりも長いその刀の刃は漆黒。

これが、彼の愛刀・黒雲<sup>くろくも</sup>。

地下とは言え、ここにはこの長剣を存分に振り回せる十分な高さ、広さがある。

彼が黒雲を構えたのを見て、男たちがそれぞれに武器を取る。

「……………若君は生かして捕らえよとのことだが、側近については生かしておけとは言われていない」

「それがどうした。おれは生き残る」

双方の足がじりりと動く。

「おおおおおおっ！！」

始まりは、誰のとも知れない雄叫び。

ひょっとしたら、それは彼の声だったかも知れない。

部屋中の壁に血飛沫ちしぶきが飛び、鉄のにおいが充満する地下室。

なんとか消えずに残った蠟燭の明かりが、座り込んで奥の井戸に背を預け、荒い息を繰り返す彼をかすかに照らしていた。

その手に握り締められた黒雲も、彼自身も、べったりと血に染まっているが、それが自身の血なのか返り血なのかは定かではない。

目の前に転がる10個の死体を見遣り、彼ははあっ、と深く息をついた。

が、次の瞬間顔を歪める。

「……………つつ……………」

左の脇腹に手を当てると、未だどくどくと血を流す刺し傷があった。

10対1だ。無傷で勝つなど不可能、むしろ敗れて死ぬのが普通。そんな状況で、大きな怪我がこれ1つで済んだことは奇跡に近い。

彼は、今度は傷に障らぬようそっと息を吐く。

疲れた。しばらく休んだら、どれか隠し通路を使って外に出よう。

それで、傷が癒えたら、あいつを探しに行こう。

彼はゆっくり目を閉じた。

井戸の底深く、海へと通じる横穴に潜り込んでひたすらに泳ぐ涼矢の胸に、何やら妙な感覚が走る。

「……………!？」

涼矢は一瞬来た方向に戻ろうとしたが、ぐっと堪えて身を翻し前へと進む。

探しに来ると、言ったから。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「……………」

窓の外では、ちち、と雀が鳴いている。

自室のベッドの上で、蒼毅はぼんやりと寝転がって天井を見ていた。

また、あの夢だ。

こここのところ毎晩見る、2人の少年の夢。

あのロン毛のほうつて、おれ、だよなあ、顔からして……………

髪を括っていた少年は、自分と髪型こそ違えど瓜二つの顔をしていた。

蒼毅は確かに男にしては多少長めの髪をしているが、背中に届く

ほどではない。

しかし、縁起でもない夢である。

あれ確実に死亡フラグだろ。

うつらうつらしながらまた眠りに落ちようとしていると、下から母の声が聞こえてきた。

「蒼毅ー、もう7時過ぎたわよー。とつとと起きなさいー」

「!!!!!!」

遅刻寸前である。

+++++

大慌てで身支度を整え、父母に笑われながら朝食を食べるのもそこそこ家を飛び出し自転車に飛び乗る。

まず自宅から自転車以最寄の青竹駅に行き、そこからしばらく電車に乗って城東駅まで。城東駅からは蒼毅の通う夢斗城東高校まで徒歩である。

なんとか電車に間に合った蒼毅は、城東駅の改札を抜け外に出ると、立ち止まって夢斗城を見上げた。

毎回毎回夢に出て来るのって、この城だよな……

夢斗城。

1000年ほど前、このあたりにあったという小国の城だ。

今では地元のシンボルとして、時々何かしら祭だのイベントだのが開かれていたりする。

蒼毅は昔から、何故かこの城が気になっていた。

だから、蒼毅の学力ならもっと近場で上のほうの高校も余裕で狙えたのに、レベルを落として夢斗城に一番近い城東高校を受験した。

城東高校に入学して半年と少し。もうすぐ冬休みなわけだが、蒼毅はまだこの城に入ったことはない。

何となく、何故か気が向かずに時が過ぎたのだ。

地下があるのかどうかすら知らないのに、何故夢の中の城はあんなにもはつきりとしているのだろう。

「おい、蒼毅。何黄昏れてんだよ、遅刻すんぞ」

後ろから肩に手を置かれ、ぼうつと立ち止まっていた蒼毅ははっとして振り向いた。

蒼毅の着ているのと同じブレザーの制服に、大きな瞳と二重瞼。明るく活発そうな印象の少年だ。

「……………更夜か。おはよう」

「おう、おはよ」

彼は、高校でできた友人だ。家はこの近所だそうで、自転車でもいいのだが、蒼毅に合わせて徒歩で通学している。

「黄昏れてんだよはないだろ。誰待ってたと思ってるんだ」

「ははっ、ワリーワリー、なんかそんな風に見えたからさ」

軽口を叩き合いながら、2人は学校へと足を向けた。

十十十十十十十十十十

「夢斗城の地下あ？」

昼。学校の食堂でパンをかじりながら、更夜が素っ頓狂な声を出した。

「なんでいきなり……」

……まあ、あるけど。昔オレ入った覚えあるし、ちょっと前も話題になってたし」

「……！ 入れるのか!？」

蒼毅の顔色の変わりように更夜は身を引いたが、こともなげに教えてくれる。

「毎年冬休みあたりに夢斗城で椿祭ってやってるんだけど。そのとき一般公開されてたはずだぜ」

何たってうちの夢斗城は丸々キレイに建物残ってるから!!

これ公開しなかったらもったいなさすぎるー、などと地元自慢が始まったのを華麗にスルーし、蒼毅はブラックコーヒーの缶を片手に思考に沈む。

あれはただの夢だ。だが。

毎晩見る、妙にはっきりとした夢。

そして、あの夢を見るようになってからずっと、この胸に蟠る、申し訳なさのようなもの。

ただの夢だと、確かめるには、いい機会だ。

蒼毅はそう結論づけると、コーヒーを喉に流し込んで更夜の地元自慢に耳を傾けた。

+++++

そして冬休み、夢斗城は椿祭当日。

更夜とともに夢斗城を訪れた蒼毅は、間近で見るその雄大かつ優美な姿に圧倒されていた。

その姿に更夜は呆れる。

「なんだよ、県下五指に入るような進学校蹴つてまで城目当てにうちの高校来たくせに、実際来たのは初めてなのか？」

「ああ……」



どこか上の空の返答に更夜はもう、あコリヤダメだと悟る。

「ごういつときの蒼毅は、何を言ってもろくな反応を示さない。

なので、背中をどついて正気に戻す。

「はしっ!..」

「痛っ!?!」

「聞けコラ。中に入る受付はあっちだ」

更夜に先導されて、夢斗城の玄関にある受付で入場料を払い備え付けのスリッパに履き替える。

受付で貰ったパンフレットを片手に更夜が言った。

「昔この夢斗領がよそに攻められたとき、城のあまりの美しさに相手の大將が部下たちに『絶対壊すな!』つつたんだと。

それでこの夢斗城はキレイなまんま残ってるってわけだ」

「.....へえ.....」

中に入ると、そこには刀や着物なども展示されていた。

歴代の領主たちが使っていたのではないかとされる長い日本刀や、武骨な鎧。他にも、奥方や女房たちが着ていそうな着物。

色々と残ってるもんなんだなーと思いつつ一周し、最後に一番

気になっていた地下へと足を運ぶ。

地下へと繋がる急なはしごを下りて、蒼毅と更夜はきよるきよるとあたりを見回した。

地下というからもっと狭いところを想像していた蒼毅だったが、その広さに愕然とする。

確かに、これならあの超長剣も振り回せるだろう。

壁には等間隔でライトが取り付けられており、足元がおぼつかないということはない。

胸がざわつくのを抑え、数ある小部屋に足を踏み入れてはひそかに井戸のある部屋を探す。

先を進む更夜が、宝物を見つけた子供のよう弾んだ声を上げた。

「あつ、やりい！！」

やっぱ入れるようになってる。ちょっと前にこの城の地下に隠し部屋が見つかったって話題になって、ずっと入ってみたかったんだよな〜！！」

わくわくとその隠し部屋に入っていく更夜について、蒼毅もまたその部屋に入る。

そこで。

部屋に入って数歩も進まないうちに、蒼毅の足が止まった。

夢に見たのと同じ位置、同じ形の井戸が、その部屋にあった。

夢と違うのは、壁中に飛び散っていた血痕が綺麗に拭き取られていることと死体がなくなっていること、部屋のすみにあった蠟燭立てがなくなり部屋にライトが取り付けられていること。

そして、井戸の横に1つのショーケースが置いてあることだ。

どこかぎこちない動きで、蒼毅はそのショーケースに近づいて中身を見下ろした。

ショーケースの中に入っていたのは、蒼毅自身の身長よりも長い日本刀。

美しく反り返った刃は漆黒、夢で見た刀と寸分違わぬそれは。

「……………黒雲……………!?!」

慌ててショーケースの中の説明書きやパンフレットをしてみるが、そこには無銘との記述があった。

実際には日本刀の銘は作った刀工の名前であり、刀そのものの名前は号というものだ。

例を挙げれば、ある刀に正宗と銘が入っていても、その号が正宗だったのか、それとも××丸とでもいうような号で呼ばれていたのかは別問題ということになる。

つまり、銘があってもなくても、この刀が黒雲と呼ばれていたかどうかは分からないのだ。

しかし、蒼毅はそこまで日本刀には詳しくない。

いや、そうと知っていたところで何も変わるまい。

間違いようがない。夜ごと夢の中の自分が握る刀だ。誰が何と言おうが、この刀は。

ショーケースを凝視して動かない蒼毅の横で、更夜は井戸の蓋を開けてみる。

「あ、さすがに金網張ってあるわ。でも確かに深そうだなー……」

井戸の縁から30cmほど下にある水面に更夜の顔が映る。

がたんと井戸の蓋を戻し、更夜は振り向いてショーケースを見た。

「ああ、この刀な。なんかこの部屋見つけたときに井戸の横にあったんだってさ。

誰も手入れなんてしてないだろうに、サビとかもなくものすげえキレイに残ってるから、学者も首捻ってちょっとした不思議だった」

「……あ、ああ、そうなのか……」

蒼毅はなんとか返事を返す。

こういう場所では、もともとの状態をそのまま残すのかと思っていたが、そうでもないのかも知れない。

まあ、確かにあんな状態ではそのまま展示、というわけにも行か

ないだろう。あまりにも血生臭すぎる。

蒼毅はもう、あれをただの夢だとは思わなくなっていた。

探しに行きたい。

不意に、蒼毅の胸に衝動が沸き上がる。

更夜は蒼毅の変化に気づくことなく続けた。

「隠し部屋が見つかったのが一昨年あたりだから、蒼毅は知らねえのかな。」

夢斗領が負けたとき、当時の領主様と奥方様は自害したって伝わってるんだけど、1人いたはずの若様……涼矢に関しては何の伝説もねえんだ。

一緒に自害したつてのが通説だったんだけど、この隠し部屋と刀井戸が見つかったからは、涼矢はひょっとして逃げ延びたんじゃねえかって説が出る。

昔、水の加護を受けられる秘宝が領主一族に伝わってたって伝説もあるし、この井戸から海に出てさ……」

「……………詳しいな」

夢と同じ涼矢という名が出たことにも驚かず、思わず蒼毅が呟くと更夜は、んー、と唸ってがしがしと頭を掻いた。

「やっぱヘンかな、こういう趣味。ちっさい頃からこの城が……てか、伝説の中の涼矢が好きで、色々調べてさ。小学生の自由研究で花丸貰ったりしてたんだけど」

妹には、今時の男子高校生らしくないって言われるけどな。

ははっと快活に笑い、更夜は言った。

「この城目当てに城東高校まで来た蒼毅なら、分かってくれそうな気がして。まあ、ムリヤリ自分の趣味押し付ける気はねえんだけど」

蒼毅は、ふっと笑った。

「いや。いつか聞かせてくれ、涼矢の伝説」

更夜の大きな目が、さらに大きくなる。

そして、満面の笑みで言った。

「おうー!!」

+++++

自分の靴に履き替えて外に出ると、そこでは野外ステージで椿の柄の入った衣装を着た若者たちのグループが創作ダンスを披露していた。

よく見れば、椿をモチーフにした小物が売られていたり、椿の苗木が売られていたり、やけに椿が目につく。

椿祭というくらいだ、それは納得できる。しかし蒼毅が不思議なのは、ダンスグループの衣装も小物も、売られている苗木も城のあちこちに植えられている椿も、全て花が紅いということだ。

さして花に詳しくはない蒼毅だが、椿には白い花や紅白の混じった花があることくらいは知っている。

更夜に尋ねると、快く教えてくれた。

「涼矢が、紅い椿好きだったんだって。

……涼矢って、わりとことう……気安いつていうか、お忍びで城下街うろついてたりしてたみたいなんだよな。だから結構人気もあって、それでことうやって涼矢にちなんで祭とかしてるんだ」

「でも、椿は『首が落ちる』といって武士や侍には嫌われてたんじゃないのか？」

「ああ、まあそつなんだけど……」

更夜は少し言葉を濁した。

「……これは、オレの勝手な想像なんだけど。

涼矢って、実はあんま領主になりたくなかったんじゃねえかって思うんだ。」

蒼毅は軽く目を見開く。

「……それはまた、何故」

「……何となく、だけど。

本当は城下街で、同じ年くらいの奴らと身分とか何も考えないで遊んでるほうが好きだったんじゃねえかな。

……ほんとは、領主一族を示す紅い瞳も嫌いで、だから……紅い花の落ちるのに、憧れてたんじゃ、ねえのかな……」

椿の木の下に、紅い花がいくつか転がっている。

花びらとして落ちるのではなく、花として落ちる椿。

最期まで、誇り高く。咲いたまま落ちる花。

椿野にいる。

夢の中の少年　涼矢の言葉が、蒼毅の耳に蘇る。

この瞳と同じ、紅い椿のあるところにいるから。

「……………椿……………」

自然に口が動いていた。

「……………他に、椿が有名なところって言ったたら、このあたりだとどこがある?」

「はあ?」

突然の質問に、更夜は変な顔をしたものの考える。

「……………そうだな、隣町の雪坂ってところに、氷泉寺ひょうせんじって寺がある。そこの椿もそこそこ有名なはずだ」

「氷泉寺……………」

蒼毅は繰り返した。



冬休みは始まったばかりだ。明日、行ってみるのも悪くない。

十十十十十十十十十十

いつもと、違う夢を見た。

「なあ。お前、何で椿好きなんだ？」

花ごと落ちるのが首が落ちるみたいだってんで、武士とかみんな椿嫌いじゃん。しかも紅って」

大きな目をした活発そうな少年に問われ、涼矢はしばらく考えてから言った。

「……色が、おれの瞳に似てるから。だから、それが落ちるのに憧れるんだ。」

額に巻いた幅の広い布で目元を隠している涼矢は、それを心底うつつしげにしていた。

「この瞳が紅くなければ、こうやって顔を隠すこともないだろ。この国じゃみんな、紅い瞳見た瞬間平伏するし」

……お前くらいだけ、街の奴でおれの友達って言えるのは」

大きな目の少年に向けていた視線を外し、涼矢は続ける。

「おれはこの国が、この国の人たちが好きだ。だから、正直平伏されるのは好きじゃねえ。

身分が違うからって、距離を置かれるのも嫌だ。

若の今ですらこんな状態なのに、領主になったらどんだけの人が

おれと対等に接してくれる?」

涼矢は、15歳という年齢に似合わない遠い目をする。

「……………」

大きな目をした少年とおれは顔を見合わせて、ぼん、とその肩に手を置いた。

「少なくとも、オレたちは」

「変わらないよ、ずっと」

涼矢は笑った。

「ありがとう。更夜、蒼毅」

+++++

「……………更夜も、だったのか……………」

ベッドの上で、天井を見ながら蒼毅は呟いた。

更夜が、自分と同じように夢で何か見ているのかは分からない。

けれど、何か感じるものはあったのだろう。

さあ。

寝起きの悪い蒼毅は、眠い目をこすりながら起き上がった。

あいつを、探しに行こう。

十十十十十十十十十十

その日、雪坂は氷泉寺。

そこに辿り着いた時点で、蒼毅は直感した。

ここじゃない。

ここに涼矢はいない。

そうは感じたものの、蒼毅は一応寺に足を踏み入れてみる。

確かに、立派な椿だ。だが、ここじゃない。

蒼毅は、幾本もの椿の中に人影を見つけ話しかける。

「あの すみません この他に、椿が有名なところを知りませんか？」

寺の和尚が教えてくれたのは、近所の自然公園だった。

だが、ここにもないと蒼毅は直感する。

そこで再び人に椿の名所を尋ね、教えて貰った場所を訪れてはここにはいないと直感する。

そしてまた人に椿の名所を尋ねと、それを繰り返し、冬の日が傾

きかけてきた頃。

さすがに疲れてきた蒼毅は、行き着いた小さな公園のベンチに座って空を仰いだ。

どこにいても分かると、夢の中では言っていたのに。

「……………待てよ」

どこにいても分かると言ったのは、自分だ。

人に尋ねて分かるわけがない。

ならば、今度は自分の気の向くまま、足の向くまま歩いて行つてやるう。

半ば自棄<sup>やけ</sup>になって、蒼毅は腰を上げた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

そして、夕暮れ。

西の空が紅に染まる中で、蒼毅は1本の椿の木の前で立ち尽くしていた。

行き当たりばつたりに辿り着いた、人里離れて存在するこの小さな寂れた公園。

その真ん中で、この椿は気高く咲き誇っていた。

その根本に何か巻き付けられているように見えて、蒼毅はひざまですく。

「　　っ！！」

蒼毅は慌てて手を伸ばし、それにこびりついた泥をこすり取った。

泥の下から現れたのは、とろりとした蒼。

夢の中で涼矢がしていた、勾玉の腕輪。

腕輪がかかったまま成長でもしたのか、幹に食い込んだそれはちよつとやそつとでは外れそうにない。

「……………ここに、いたんだ」

呆然と、蒼毅は呟く。

その隣に、誰かが立った。

その瞳が紅く見えたのは一瞬。

夕焼けが映ったか、彼の見る椿が映ったか。

おせえよと、椿を見たまま彼の口が動いた。

「……………ああ。悪い」

そつ言つて蒼毅は苦笑する。

きりりとした眉、意志の強そうな目。黒い髪を短く切った、夢の中で何度も見た顔。

ただ、その瞳はもう紅くない。

「遅くなったな。約束通り、逢いに来たよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6147u/>

---

椿野にいる

2011年10月8日23時22分発行